

# とんぼの話

## 哲 化 生

高く澄み切つた青い青い初秋の空を、白く浮んだ雲の下を、輝かしい眞晝の陽をあびて、樂しうに心地よげに、行つては來、來ては行くあのとんぼは、如何に子供達の驚異の眼を見張らせることとせう。

ほんの小さい溝の様な水溜りにも、今頃は赤蜻蛉が小さい飛行機の様成群り飛んでゐますが、必ずそこには蜻蛉の数にも負けぬ位のもち竿と日に焼けた子供の顔が眼を光らして丁度戦争の時敵機を叩き落す位の氣持で、追ひまわしてゐます。しかし空の王者の様なとんぼは仲々もち竿にさわりません。彼の眼は一寸外觀から見てもわかるや

うに非常によく發達してゐて、その大きい複眼は後の方にも一部は向つてゐて殆んど半球形以上の圓さがある上に頭部の附根は非常に廻轉に便になつてゐるので一層よく利くやうに出來てゐます。ですから如何に速く子供が竿を振りまわしたとて餘程の機會でないと飛んでゐるときは捕まりません。

そのよく利く眼で、あの速く飛べる翅で、とんぼが空を廻り廻るのは、美しいとも、勇ましいとも自由そのものだとも云へませうが、とんぼ自身にとつては——勿論科學者の想像で、とんぼに云はせれば又云ひ分もあるかも知れませんが——バン

を得んが爲に外ならないのです。彼のバンは生きてゐて逃げます。蚊とか蠅とか時には小さい蝶や蛾までが餌食となりますが、それ等を捕へるためには、あの快速の翅と千里眼なくては餓死してしまひます。とんぼが外観上優美な點の外にどこかいかめしい感のするのも、英語で(ドラゴンフライ)

イ)龍と云ふ字をつかつてゐるのも彼が空の狩人の商賣であるからであります。とんぼは子供達でも小さい子供は恐れて手を出さぬ子があります。が、やはりその大きい眼、頑丈な顎等からの感じからではありますまいか、又同様の事が英國の田舎であつて英國のある地方ではとんぼをホース・ステインガー(馬を刺すもの)と呼んで恐れてゐるさうですが、刺す道具は、とんぼは持つてゐません。しかしそれ等の小さい子供等に恐れられてゐる以上に蠅等の小さい昆虫達には恐れられてゐるよくとんぼが飛んでゐて、急に方向をかへたなど

思つてゐると、あの大きい口に小さい虫をくわへ乍ら、何喰はぬ顔をして平然と飛び乍らムシャムシャ喰べてゐるのを見かけます、その口は特別に捕食に便に出来てゐますが面倒な構造は抜きにしても、時々前肢で口のまわりをこする位で唯口だけ動かして食べてしまふ程便利な口なのです。

とんぼが小さい虫達を捕へて食べると同じやうにとんぼ自身も時々かまきり等に食べられます。先頃庭先の竹の葉の前で大きいかまきりがむぎわらとんぼをあつて鎌で挟んで、あの三角な頭をまげ乍らむさぼり食つてゐましたが、しばらくしたら頭と翅と足だけ残して皆柔い所は食べてしまつてゐました。

とんぼの飛び歩く時間は陽のかんかん照つた日中に限られてゐて、その頃には彼の好物の小虫等が出盛る時間なのです。何しろ太陽の熱い光澤が好きなのですから、雨が降れば勿論の事、曇つた

してもあまり活動したくないので、ものうげに木の葉や草の葉にぢつと止つてゐますが、雨が降つた後快晴の秋空は、とんぼにとつては最もうれしい時ですから、赤とんぼ(あきあかね)は群をなして垣根の縁から電線の上から物干竿の上まで列をなして、うす柔い翅を輝く陽にさらしてゐます。

そんな時には必ず水溜りが出来るので、その上を低空飛行して來ます。これは主として産卵のためであつて、とんぼと水溜りとは切つて切れぬ縁があるからです。とんぼの産湯の桶はこの水溜りであると同時に、あの自由な活潑な華やかな生活をする前には、暗い静かな前半をこの水溜りで暮さねばならないのです。そのとんぼの水の生活は後に又述べると思いますが、この様に陽の照つた時には活動しても曇つた時に休むのはどう云ふ場所であるかと申しますと、水邊の草の上等が最も好む所なのです。小川の邊の水草の上、沼地の邊の林

の葉陰等は休息の地としてお誂へ向きですが、町の中などでは庭先の植込とか、色々の樹の葉等に止つてぢつとして休んでゐます。よく夜になつて街燈だとか、涼風を入れるために開け放した家の電燈等に飛び込んで來て子供達の玩具となつて捕へられますが、これもその光線を好む性質が然らしめたのです。

晝の陽のあるうちは、あの強い大きい翅で青空を我物のやうに飛び廻つて、食物をとり友達と交際して忙段されて居り、時々木や葉にとまつて休む位のものですが、一日の勞働につかれて求める休み場所は彼の安息の地であつてその場所は定まつてあり、長い旅に出てはその安息の地で休み、又再び長途の遠征にのぼり歸つて來ると又その同じ場所で休むと云ふやうに、同じ安息の地を根據として活動をして、決して無暗に飛んで住所不定でうるつくと云ふことはありません。時によつて

は同じ場所で同じ木のしかも同じ葉にとまることさへあると云はれてゐます。

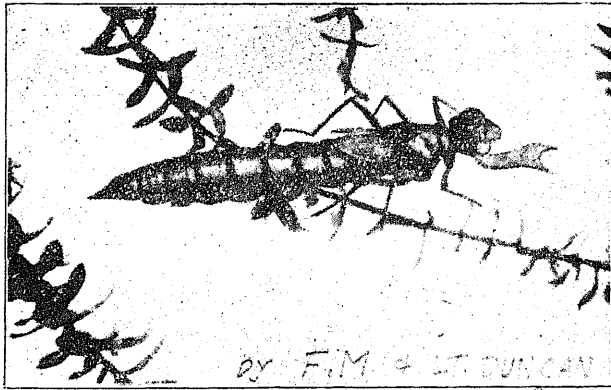
かく、働いては休み、休んでは働いてその日を送つてゐるとんぼは自己の生存を確立させると同時にすべての生物と同様に子孫の繁榮をはかることを一生の終局の目的として持つてゐますので、晴れた陽の強い秋空に亂れ飛ぶ無数のとんぼは無上の快樂に酔ひつつ、戀愛の亂舞、結婚の舞踏を續けて、果ては雌は子孫が最も安全に繁榮出来るやうに適當な水溜りを目がけて滑るやうに飛び、その上を行き來して尻を少しまげ乍ら、母の愛から子の安らかなるを祈りつつ産卵し、終れば程なくその生を終へるのです。

とんぼの自由な華々しい空の生活の前の生活は到底その次の美しい姿を想像すべくもない變つた姿です。卵から孵つて、程たつと水中の水草の根とか、水底の泥の中とかに、一寸見ると蜘蛛のや

うな怪物となつて、あの明るい陽のまぶしい空とは比較にならぬ暗い陰の中に、あのスレンダールな空の姿とは變つた醜怪な姿となつてぢつと潜んでゐます。

かかるとんぼの前半生即ち通常の昆虫の幼虫に相當する時期を「やご」と稱んでゐます。夏の中から秋の始めにかけて、近所の池でも水溜りでも沼でも小川へでもお出になつてごらん下さい。そして魚をすくふ「たま」とか云つてゐる網で——何んでもすくふものならかまひませんが——小川なら川の底を泥と一緒にすくつてごらん下さい。天候はどうでもかまひません。唯川でもあまり大きかつたり、水が早く流れたりしてはだめです。田の間を流れる小さい川(市が二三尺位の)などは最も多くありますし、田の中でも——あまりかさまわすとお百姓さんから叱られますが——その泥の中は澤山もぐつてゐます。沼でも結構です。何しろ

すくつて見れば、その泥の中によりちよちと動いて歩く奇妙な恰好の虫がゐます、今頃の様な初秋で



すと割合と小さいものが多いでせうが時によると色々な種類のものが捕れます。

これこそ、あの優美なとんぼの前身の「やご」なのです、唯今申しましたやうに「やご」にも大

小種々ありまして「やんま」の類の「やご」は非常に大きいですが、今頃多い、秋あかねの「やご」は又

大層小さいものです。これ等を捕へられたら硝子製の水槽のうちに多少の水草と共に入れておいてごらん下さい。子供等にとつてはとんぼの子供がかかる感じのものであると云ふことは確かに驚異でせうし、昆虫の戀態と云ふことに何等か理解することがあるでせう。これを飼育するには別に何の手間もかかりません。唯時々水が腐らぬ程度でサイフォンで水を一部分とりかへてやりさへすればいいのです。水槽の水面より高い位置に新しい水を盛つた器を置き、その器の水中にゴム管でも曲つたガラス管でも一端をひたして他端を水槽の上におき、その管中の空氣を吸ひとつて管内に水を滿してやれば自然これは管を傳つて流れます。それと同様に他の同様な管の一端を水槽中に入れて他の一端を何か他の器の上において管中の空氣を抜くと汚れた水槽の水はその器へと流れ出ます。こうして水槽には新しい水を入れ汚い水を出

して水の交換 行はれるわけで、この操作を水がくさらぬ程度で、時々する必要がありますが、又あまり清い水ですと中に微生物や小さい昆虫かゝらなくなつて餌にこまることがありますから、一部分づつ時々取りかへるので丁度よいのです。

かくして水槽に飼はれた「やご」は程たつて、——その期間も「やご」の種類で、一様に云へません。各自實驗なさつて下さい——漸次形がかわつて來ます。初めはどう見ても翅となるものなんか無い様に見えますが數回の脱皮をするとその泥色の殻にも小さい翅の外形が出來て來ます。この「やご」はとんぼと外觀や運動の方法は似もつかぬものですが、その習性とする捕食性は同様であつて、とんぼが勇ましく空を翔るのに反して「やご」はぢつとしてゐて小さい虫等の傍に寄るのを待つてゐてあのとんぼと同じやうな強い口で餌物を食ひます。主に餌物となるのは小さい昆虫で、水槽で飼

養する時に、「みぢんこ」、「ぼうふら」等を入れてやると好んで食べるやうです。あの泥の様な色をした皮を着てぢつとしてゐるときはどうしても草の根が塵位にしが見えませぬから、暗い所に行く小虫のうっかりしてゐるのも、亦致し方ないでせう、この醜い虫もやはりどこか恐ろしい感じがあるのでせうか、英語でドラゴン・オブ・ザ・プール（水溜りの龍）と云はれてゐますが、小さい虫を餌とする「やご」自身が、あの狡猾な「水かまきり」の餌となることは可成しばしばあるやうで、先頃數十匹の、夏あかねのやごを三匹の水かまきりと一緒に水槽に飼つてゐたら數日を経ないで全滅させられたことがあります。そんな色々の他の昆虫との關係等も、一緒に他の昆虫を飼つてゐて子供等に觀察させるのも興味あることでせう。段々と日が経つに従つてこの水の怪物は成長し前にも申しましたやうに、他の昆虫の幼虫と同様

に脱皮をなし、その都度少しづつ形がかはつて来て、腹部は段々と長くなり、翅を包む殻の部分は段々と大きくなつて來ます。これも飼つてごらんになれば仲々興味あることです。さて、さうして大きくなつて來ますと、いよいよ長い間の水の生活に別れる時期が來たので、「やご」は何となく不安な様な様子をして來て、たへずあちらこちらに動き廻り始めて、うろろしてゐますが、水邊の草の水の中にある部分へあの足で抱きついて、やがて、よちよちと登り始めます。一寸水面のところで休んで又一生懸命によち登り、水草の水面から相當の高さに生えてゐるものを、どんどん登つて、頂上に行くと、まるで水面を見下して、自分の住みなれた家に別れをつけるかの如く、又は附近に危害を加へるものがありはしまいかと警戒するか

のと、どうするかとちつと見てゐると、とうでせう。又今登つた

草を下り始めるではありませんか。何のなめに降りるのか知りませんが、こんなことを二三回繰り返してやり、見てゐる方をいらいらさせます。三回目位には登つてしまふと、しつかりした足場を見付けてそこへ六本の足を釘付けにしたやうに動かなくなります。するとしばらくは靜かな動かない休息の時期が來ます。

とんぼは不完全變態で蛹の時期を経ませんが、この休息の時間は短いとは云へ、蝸の時期に相當するといつてもいいでせう。ほんの僅かの時間たつと、ちつとしてゐるうちに「やご」の體は何んとなく光澤が出て、中が充實したやうに、ハチ切れるやうになつて來て、眼なども遙に大きくなり、まるで光るやうに光澤が出て、翅の鞘も光つて來ます。いよいよ脱皮です。昆虫の多くの脱皮のやうに、背が割れます。肩が出ます。最後に腹と足が抜けて、出て來た姿は、又あのとんぼとは似ても、

青白い、柔かい、絹の様に光る體で、翅も皺だらけでとても使へさうにもありません。

然し、初秋の強い太陽は、青い空を通じてにこやかに微笑みかけてゐると見るうちに、青白い翅は皺をのばして、輝かしい丈夫さうな翅となります。體にもちやんと色がつき、秋あかねであるなら、あの眞紅の美しい色は秋の陽に漸次染め出されて、いよいよ一人前のとんぼとなります。さうすれば羽ばたきして見て秋の空へかく飛び上り、水の泥の中の過去と現在の自分を比較する如く、住み古した水溜りの上を行き來して飛び去ります。この様にとんぼの脱皮して成虫になるには強い秋の光澤を必要としますから、秋の空の晴れた日は、曇つた日に比較して非常に多くのとんぼをつくり出します。

この前にのべました経過は水槽の中で充分見ることが出来ますが、水草を水槽中に入れることを忘れてはいけません。それから念のため水槽に網

をかけておけば生れたとんぼも逃がさずすみます。網をかけぬと、知らぬ間に抜け殻だけになつてしまつて、實物のとんぼはどこへか飛んでしまつてゐることがよくあります。成長したとんぼを飼ふことは至難ですが、「やご」を捕へて來て、「やご」からとんぼになる経過を水槽中で幼児に見せるのは興味多いこととせう。又成長したとんぼを網のうちに入れて、これに蠅の生きたのをやるとその捕食の方法がよく觀察出來ます。

さて、長くなりましたが、大體とんぼの習性等を申し上げましたから、次にはとんぼの種類について簡単に述べませう。

とんぼには大小様々のものがありますが、それ等をくくるめて「とんぼ目」と云ふ動物分類上の位置が與へられてゐます。「とんぼ目」の内には四つの科がつくられて、とんぼは四つに大きく分けられます。とんぼ科、やんま科、いととんぼ科、かほとんぼ科の四つで、とんぼ科はごく普通のとんぼです。



先づ今頃、電線の上や垣の縁のやうに列を作つて一杯に群がり止つてゐる身體が赤くて翅は根本の所が少し赤味がかつてゐる小さいとんぼがあります。これは「うすばきとんぼ」と云つてゐます。未だ赤いとんぼに「みやまあかね」と云ふのがあつて

これは翅に褐色の斑が入つてゐるからよくわかりませんが、名前に相當せず、よく平地を飛び廻つてゐます。赤とんぼはその位ですが、赤とんぼに次いで子供の眼に付くのは、今頃は少しは減つたかも知れませんが非常に一般にゐるので有名な「しほからとんぼ」と云ふのがあります。これは子供等がよく知つてゐますが、よく似た名前と身體を持つてゐる「しほやとんぼ」と云ふのがあり、「しほやとんぼ」の雄は「しほからとんぼ」とも云はれて、子供達が云ふ「しほから」にも二種あります。この「しほやとんぼ」の雌が例の「むぎわらとんぼ」です。「しほやとんぼ」は「しほからとんぼ」より出る時期が早く五月頃に出ます。それ等極めて子供と密接な關係を有するとんぼ類の區別は子供の頭にもなるべく、はつきりさせておいたらどうでせうか。その他珍らしい變つたものも多くあります。が、一二例をあげますと、翅が色がついて大きくて體の小さい美しいとんぼもよくとんでゐます。

皆同じあかとんぼとしか映じないのですが、あかとんぼにも色々あるのです。あかねの二種の外によく眞紅の色の體と翅のある、あかね等より遙に大きいあかとんぼがあります。これは「せうぜうとんぼ」と稱んでゐます。よくゐるので眼の速い子供にはよく捕られます。その他、色がもつと黄色くて翅まで黄色い小さいとんぼがあります。これは「うすばきとんぼ」と云つてゐます。未だ赤いとんぼに「みやまあかね」と云ふのがあつて

その形からして、「てふとんぼ」と云つてゐます。

これはあとで述べる「かはとんぼ」とは異つて體が小さいから見分けがつかます。その他、こしあきとんぼ、かほじろとんぼ等と云ふ變りものがありますが、前者は腰に當るところが白くなつてゐるし、後者は顔に當るところで白くなつてゐるのでその名を得たのです。その外よく「やんま」と間違へられる位大きい黒い横に黄の筋の入つたとんぼがあります。之は「ちほやまとんぼ」と云はれてゐます。話はやんま科に移ります。

「やんま」はとんぼのうちでも大きいので子供達にとつては空の王者の様に思はれ、「やんま」一つ捕ることは、「しほから」や「むぎわら」を捕るよりはるかにうれしいやうですが、その「やんま」のうちでも王様は「おにやんま」です、大きさでも大きいし、その速さは恐るべく、その口は蝶や蛾までも裂き喰ひます。空は高い所をのみ翔り、夜ででもないとい決して休んで止まりません。次に「ぎん」と

通稱云はれる「ぎんやんま」も子供達のあてがれの對象ですが、これも仲々勇ましくて、強いとんぼです。その他變つたもので、「こしほそやんま」と云ふ腰の糸の様にくびれたものや「うちわとんぼ」と云ふ尻の變なものもあります。次は、いととんぼ科ですが、これは子供達の「とほすみとんぼ」と云つてゐるもの入るもので、細い小さい可愛いらしいとんぼです、次の「かはとんぼ」は、名の如く川邊によく見られるもので、井の頭公園の池の邊や川の邊にはよくあります。翅が體の小さい割に大きくて、美しい色がついてゐます。「はぐろとんぼ」は雌は黒紫、雄は緑の美しいとんぼです。「かはとんぼ」は皆美しく、伽嘶のフェアリーになるのはこれではないかと思はれます。とんぼの種類のお話は簡單ですがこれで終りに致します。何しても子供と、とんぼは離すことは出来ません。とんぼの正しい知識は子供等によつて喜んで吸ひ込まれるにちがひありません。